宗密禪師の禪教一致論に就て（一）

安藤義鑑

序論

一

唐代は儒佛道の三教共に隆盛を極めた時代であるが、殊に六朝時代に鬱然として興隆を極めた佛教は、此の唐代に入つて愈〻面目を一新し支那人の思想の熟した時代であつて、一大組織を構成し大乘佛教の眞髓を永久に大漢の土に樹立し得たのである。その佛教の大勢を眺めるに、陳隋の際に三論宗を大成した嘉祥大師、天台宗を大成した智者大師、何れも支那人の思想力の豐富を實證したものであるが、唐代には其の活躍は頂天に達し、天台の大組織に比して正に伯仲の間にありと云はるゝ賢首大師の華嚴宗を始めとして、四分律宗の祖南律師道宣、唐代新譯佛典の權威玄奘三藏の法相宗、俱舍宗、淨土宗を大成したる善導大師、支那に初めて密教を傳へた善無畏三藏等前後輩出して佛教界空前の偉觀を呈し、禪宗に於ては六祖慧能の南禪隆盛を極め數多の學匠輩出し、唐の中葉

に至つて稍〻衰運に赴いた天台・華嚴の二敎に荆溪大師湛然、淸涼大師澄觀出でて各々大部の著述をなして一旦衰運に傾いた天台・華嚴の爲に萬丈の氣焰をあげたのである。それだけに極端にまで敎義の論戰に火花を散らし互ひに干戈を交へたのである。

卽ち當時は一方禪宗の甚だ盛んな時代であつたから、之に對しては敎觀並び傳へずして單に觀法の一に偏し、敎外別傳と稱して智慧の一面を輕視するを非難し之を斥けて闇禪と爲し、一方に於ては玄奘所傳の法相權敎を排して一乘の幽音を開き、華嚴の淸涼大師が華嚴宗の爲めに大に氣を吐くに及んで又此處に華嚴に對抗するの態度を執るに至つた。

當時の天台の荆溪大師は、天台大師に比しては創見的なるに對して彼は祖述的の人ではあつたけれども、天台宗にとつては實に天台大師に次いで重要な人である。然るに彼と同時に華嚴の淸涼大師出でて大いにその宗旨を振はすに及び、荆溪は時に之と對抗せんとし、之が爲に從來の天台宗には無かつた所の或る分子を天台宗に加へる事となつた。それは淸涼が盛んに「起信論」を引いて其の華嚴敎義の說明の用に供したので、荆溪も亦此の「起信論」を引き取り之に依つて天台の一念三千の理を解釋せんとした事である。荆溪は彼の涅槃佛性を明らかにしたる「金剛錍」の中に「起信論」の緣起的なものを最も多く應用したが、之を詳しく考へて見ると荆溪が「起信論」を用ひたのは敵論者に對する便宜上から來たものである事は明らかな事であるが、しかし之が「起信論」を天台に適用した

端緒となつて後の天台宗には少なからぬ影響を及ぼしたものである。

一方に華嚴宗は賢首入寂の後は慧苑が師の說に背いて異義を主張してから衰へてゐたが、清涼になつて彼は華嚴を再興した。處が此處で考へて見ると清涼が華嚴を再興したと云ふ事や、又祖述的であつた處は非常に天台の荆溪に似て居たのである。その上當時の禪宗の影響を受けてゐた事の甚しかつたことは彼自身禪敎一致の端緒を開いたものであつて、遂に彼の弟子たる宗密禪師に至つて全く禪敎一致論を書くに致らしめたのでもわかる。

之を以て見るに清涼は慧苑の師說に背いた異議を排して賢首の本旨に復せんとして居たのであるが、又大いにその趣きを異にして彼獨特の點があつたのである。華嚴敎義に於て明かな如く、賢首は頓敎なるものを說いてゐるが賢首の時代には未だ禪宗と云ふものは眼中に置かなかつたのであるから、禪宗が頓敎だとは彼は考へなかつたと云うて良い。然るに清涼に至つては頓敎とは禪宗なりと言明するに及び、華嚴と禪とは頗る接近するに至つて了つたのである。その上清涼は同別二敎に就いて論じ、五敎を配し次の如く云うて居る。

- 別敎小乘（四阿含經等）――小乘
- 同敎三乘（解深密經等）――大乘始敎

同別二教
- 同教一乘（法華經等）
  - 大乘終教
  - 大乘頓教（禪宗）
- 別教一乘（華嚴經等）
  - 大乘圓教

と云ふ如くに定めて以て禪宗なるものを同教一乘の極致であると爲し、而も之に反して天台なるものを終教の位置に迄降下して了つたのは卽ち荆溪の唱へる所の天台に對抗したるものであつたのである。又淸涼は「起信論」の中に說く所の平等差別一にして二、二にして一と說く性相融の論に基いて殆んど天台宗の特色とも見るべき性惡不斷の說を論じて、天台では佛だからとてよく性善を斷じたのでは無いし、又闡提だからとて性善を失つたのでは無いと云ふけれども、心佛衆生の體性は無盡であるから如來も亦性惡不斷であると云うて居るのである。

斯くの如くにして淸涼は一方には禪を擧げて天台を抑へ、且つ天台の理を却つて自家に應用して天台と對抗せんとしたのである。

此處に「起信論」そのものに就いて見るに、「起信論」なるものは眞諦の譯したものであつて、元來その說く所は阿賴耶緣起の一派の論を示すものであるけれども、これが玄奘所傳とその說き方が違ふ爲めに賢首大師は此の玄奘に對して、却つて此の「起信論」の說を稱揚して玄奘所傳の說に反對し

「起信論」に於て平等差別一體不二を論ずる事甚だ至れるものあるにより、大乘教の眞理は實に此處に至つて盡くるから之を大乘終教とすると云うて、玄奘所傳の法相宗を抑へて然る後華嚴は其の最上位にあると云ひ自己の立場を示したのである。それで賢首が「起信論義記」を書いたのは彼が、「三論宗十二門義記」を書いたのと同じ樣に法相宗に對抗する道具と云うて良いのである。斯くの如くして「起信論」が重要に用ひられて來たので「義記」以前に「起信論」の註を書いた人が無いのではないけれども、賢首大師の註が非常に周備盡くさゞる無きが爲めに佛教史上餘り重く見られなかつた「起信論」が、大いに學者達の研究を促進する樣になつたのである。就中此の唐の荆溪清涼の時代に至つては、清涼は盛んに之を用ひて其の性相融會差別不二一體を說く所からして前述したる樣に性惡不斷論の一依憑となり、終には賢首が大乘終教と爲したる此の「起信論」をば一層擧揚して、之を殆ど圓教に班せしむるに至つたので、結局之に依つて禪教一致を證明する所の一根據とすること、なつて來たのである。之が宗密に至つて其の極に達し、遂に禪教一致論となつたのである。

斯くして「起信論」はそれ自身の教義には關係の無いことであるが禪教一致論の根據となつて來て了つたのである。

二

飜つて此處に禪宗のみに就いて見るに、達磨以後は慧可・僧燦・道信・弘忍の五祖迄の間は不明と

されて居る位であつたが、僅かに四祖の下で別に牛頭の禪と云ふものが分れたのみで、五祖の下に來てはかの有名なる六祖慧能と神秀との壁書のことから遂に南頓北漸の區別が出來て所謂南禪北禪となつた。六祖の禪は南方に行はれたのであるが、それはその法系に屬する大底の人が皆南方に化を布いたからであつて、懷讓・行思・馬祖・百丈・黃檗・潙山・仰山・雲門・洞山・曹山・石頭等皆南方に居た。ところが北方に頓禪を布いた人には僅かに臨濟の義玄禪師が北方鎭州の臨濟院に居つた位のものであるから、北方には神秀の北禪のみが勢力を振つてゐたのである。之に就いて「景德傳燈錄」卷五を見るに、

因兩宗盛化。秀徒衆往往譏南宗曰。能大師不識一字。有何所長。

と云うてある程である。

此處に於いて六祖下の荷澤は天寶年間に北方に行つて南頓の爲に氣焰を吐いた。斯くして荷澤が北方で南頓の爲に氣焰を擧げた事が兩派の接觸となり、南頓北漸は水乳の和合を缺き南北對抗し、爭ひが隨分と烈しくなつたのである。「宋高僧傳」を見ると、

南北二宗時始判焉。致普寂之門盈而後虛。天寶中御史盧奕阿比於寂。誣奏會聚徒疑萠不利。

……勅徒荆州開元寺般若院。

と云ひ、宗密も彼の「圓覺經大疏鈔」卷三に、

天寶十二年。被譖聚衆。勅黜弋陽郡至十三載。……又敕多移荆州開元寺。

と云うて居るのを見ても當時の南北の樣子が知られる。斯くの如くであつた爲めに心ある者は一方に偏し、他方に執する有樣を見るに偲び無いものがあつたのである。其處で南陽の白崖山に居た所の慧忠は神會(荷澤)逝いて後直ちに之に代つて、南禪を京師に唱導した人であるが、彼は南方禪將の弱點を刺いて大いに刺戟を與へ、身心一如の大覺心を持して卽心卽佛の謬解を斥け、達磨正宗の眞隨に徹して此の時代のあらゆる缺點を指摘し、徒らなる戲論を排して遂に禪敎一致の論を出すに至つたのである。當時南方の禪者は口に任せて說き、多く經論を輕んじたるにかゝはらず、彼は反對に博く經律に涉り兼ねて論藏を硏究したのである。彼の言を見るに、

示衆曰。禪宗學者應遵佛語一乘了義契中心源。不了義者互不相許。如師子身蟲。

と云うて居る。かくして慧忠は禪敎一致說を出して當代に向つたのである。

三

上述の如く當時は一方に淸涼と荆溪とが「起信論」を引き出して論じ合ひ、互ひ互ひに干戈を交へて而も其の末は之が禪敎一致論の根據を爲す事となり、一方禪宗に於ても南頓北漸は徒らなる爭ひに陷り、結局はその爭ひから飛躍を欲してゐた樣な時で、慧忠の樣な人が出て禪敎一致說を出す樣になつてゐたのである。

此の盛んな而も最も重大なる時代を受けて出た宗密禪師は此處に彼獨特なる明晰なる頭腦と確固たる信念に基いて「禪源諸詮集」を著はし、禪の諸派を批判し、佛教判釋を試み遂に理路と組織と共に整然たる禪教一致論に到達したのである。彼自身「禪源諸詮集」に曰く、

法久成弊。錯謬者多。經論學人疑謗亦衆。原夫佛說頓教漸教。禪開頓門漸門。二教二門各相符契。今講者偏彰漸義。禪者偏播頓宗。禪講相逢胡越之隔。宗密不知宿生何作薫得此心。自未解脫欲解他縛。爲法忘軀命懶人切於神情。

と云うて禪教といふものを明らかにして共に佛の本源に歸さんとし、又曰く、

但佛經開張羅大千八部之衆。禪偈撮略就此方一類之機。羅衆則漭蕩難依。就機則指的易見。今之纂集意在斯焉。

と云うて「禪源諸詮集」を編纂せる意とその立場とを明らかにしてゐる。故に當時の相國裴休は彼に最も親しかつた人だが同書に序を書いてその始めに、

未曾有也。自如來現世隨機立教同示妙門。菩薩間生據病指藥。故一代時教開深淺之二門。一眞淨心演性相之別法。馬龍二士皆弘調御之說。而性空異宗。能秀二師俱傳達磨之心。而頓漸殊稟。荷澤直指知見江西一切皆眞。天台專依三觀。牛頭無有一法。其他空有相破。眞妄相收反奪順取密指顯說。（中略）雖但爲證悟之門盡是正眞之道。諸宗門下皆有達人。然各安所習。

通少局多故。數十年來師法益壞。以承稟爲戶牖各自開張。以經論爲干戈互相攻擊。情隨函矢而遷變。法逐人我以高低是非紛拏莫能辨則。向者世尊菩薩諸方敎宗。適足以起爭後人增煩惱病。何利益之有哉。我圭峰大師久而歎曰。吾丁此時不可以默矣。於是以如來三種敎義。印禪宗三種法門。融瓶盤釵釧爲一金。攪酥酪醍爲一味。振綱領而擧者皆順。

と云うて餘す所がない。斐休は尙その後に圭峰を賞して、

若吾師者。捧佛日而委曲廻照。疑曀盡除順佛心。而橫亘大悲窮拗蒙益。則世尊爲闡敎之主。吾師爲會敎之人。本末相符遠近相照。可謂畢一代時敎之能事矣。

と云うて世尊と宗密とに依つて本末相符して一代時敎の能事畢れりとさへ言つて居る。

再び此處に考察するに彼の禪敎一致論は上來に於て述べて見た如く、その還境の影響と要求とに依つて作されたと同時に彼獨特の高き見地から全佛敎を批判してその一致を明らかにし、遂に釋尊の根本精神の本源に歸さんとしたものである。卽ち釋尊は種々なる機根に應じて種々なる說法をなされたけれども、その目的とする所は一であるといふ所に歸さんとして、彼の思想內容としての絕對眞心、換言すれば絕對一心を高唱したのであつた。斐休の「傳法碑」に、

釋迦住世八十年。爲無量天人聲聞菩薩。說種種法最後以法眼付大迦葉。令祖祖相傳別行于世。願此法衆生之本源。諸佛之所證。超一切理離一切相。不可以言說智識有無隱顯推求而

得。但心心相印。印印相契使自證知光明受用而已。

とあるが、此の如き所であり、又「禪源諸詮集」の序の

如來雖別說三乘。後乃通爲一道。

と云ふ所であつたのである。以下本論に入つてその詳細を見やう。

本論

一

先づ最初に宗密の傳を見るに、宗密は姓は何と云ひ、果州西充の人であつて、「宋高僧傳」及び「景德傳燈錄」には元和元年出家として居るが、「圓覺經大疏鈔」卷一之下を見ると宗密自ら

卽七歲乃至十六七爲儒學。十八・九・二十一・二之間素服莊居。二十三又卻全功專於儒學。乃至二十五才過禪門。方出家矣。

とあるから宗密は幼少の時分は專ら儒學を修め、長じて經論を習ひ唐の德宗帝貞元十九年二十五歲にして禪門に出家してゐるのである。故に「宋高僧傳」「景德傳燈錄」に元和元年とあるは誤りであると云ふ可きである。彼の授業師は「圓覺經大疏鈔」卷一を見ると、

遂州在沿江南西岸。宗密家貫果州。因遂州有義學院大闡儒宗。遂投詣進業。經二年後和尙(道圓)

從西川遊化至此州。遂得相遇。問法契心。如針茶相投也。

とあるから遂州大雲寺の道圓である。宗密が裴休の爲に記せる「禪門師資承襲圖」に依ると、

六祖慧能—荷澤神會—磁州智如—益州南印—遂州道圓—圭峯宗密

である。「景德傳燈錄」第十三には磁州智如は磁州法如として居る。又益州南印は荷澤の直弟となし荆南惟忠を法如の嗣として居てその傳を載せない。それから後彼は「圓覺經」を得て感悟流涕禁ずる能はず、之を自ら叙して、

宗密沙彌時。於彼州。因赴齋講。到府吏任灌家。行經之次。把著此圓覺之卷。讀之兩三紙。已來不覺身心喜躍。無可比喩。自此耽翫乃至如今。

と云うて居る。道圓禪師も彼に、

汝當大弘圓頓之敎。此經諸佛授汝耳。

と云うた程である。之に依つて彼は數年の間圓覺經を勉强したが意に滿たなかつたので、華嚴法界觀門を尋研して江山を過ぎ、元和元年には襄州に抵り、恢覺寺の靈峰に遇うた。靈峰は華嚴の清涼の弟子であつて、宗密が會見した時は病床に寢て居たが、此の時宗密は靈峰より清涼大師澄觀の著述に係る「華嚴疏」を得て大いに喜び、「吾れ禪に南宗に遇ひ、敎に圓覺に逢ふ。而して今又此の文に接す我意足る。」と云うて以後大いに之を研究した。日夜怠らずして遂に豁然として大悟し禪敎共

に通ずる事を得た。翌元和六年には東都永穆寺に行つて徒衆の爲めに講述を爲し、同年九月七日に講を了つたが聽衆は皆妙法に遇ふ事を得て大感喜し、臂を斷つてその懇誠を表した程である。然し宗密は之に依る師無きを以て自ら意を安んぜず、彼は直ちに小師玄智輝を使とし、清涼大師澄觀に書を致し所解を述べて遂に師資の禮を執つたので、清涼は之を見て復して曰く。「汝所解猶吾之心」と云うたので直ちに都に入り、清涼大師に事へ敎を受けた。それより盛に禪敎一致を唱へたのである。終南山智炬寺にて大藏經を閲し、長慶元年正月には退いて終南山草堂寺に居り、後復圭峰蘭若に入つた。文宗帝の太和二年には徵されて入内し紫衣を賜はつて大德となつた。「宋高僧傳」には會昌元年入滅とあるが、裴休の「傳法碑」に依れば開成五年に壽六十有二にして寂した。定慧禪師と謚す。彼の一代の著書は、

圓覺經大疏　廿六卷　　華嚴綸貫　十五卷　　起信論疏　五卷　　原人論　一卷

四分律疏　五卷　　禪源諸詮集　百卷

その他涅槃・金剛・唯識・孟蘭盆法界觀行願經等の經疏、禮懺修證・圖傳・纂略等凡そ二百卷に達した。而して禪敎一致論を主として書いたものは「禪源諸詮集」百卷であるけれども、今はその都序四卷を殘すのみである。此處に彼の禪敎一致論を述べんとするのも此の都序四卷に依るのである。因みに之に序を書ける裴休に就いて見るに休は宣宗帝に仕へて相國であつた人で休の傳に、

家世奉佛。休尤深於釋典。太原鳳翔近名山。多僧寺。視事之隙。遊踐山林。與義學僧講求佛理。中年後不食葷血。常齋戒屏嗜欲。香爐具典不離。齋中歌贊以爲法樂。

と云うてある程に佛敎に心醉した人であつて、常に宗密に最も親しく敎へを受けた人である。宗密の著書は殆ど休が序を書いて居る。

二

宗密は右の傳に明らかな樣に始め禪を道圓に學び、華嚴を澄觀に學んだのであるから、彼の思想の影響は禪は道圓の系統たる荷澤神會の思想を汲むものであり、敎は澄觀の思想を汲むものである。

今荷澤の禪思想を見るに、荷澤は云ふ迄もなく六祖慧能に受けて出た人であつて、眞空を力說し無念を宗とするのである。その言に、「眞空は是れ體、妙有は是れ用、妙有は卽ち摩訶般若、眞空は卽ち淸淨涅槃、般若は無知にして涅槃を知り、涅槃は無生にして般若を生ず。故に有無雙べ混じ心境兩つながら亡ず、此處に於てか善惡の拘る所とならず、靜亂の攝する所とならず、生死を厭はず涅槃を樂しまず、無も無なる能はず有も有なる能はず、行住坐臥動搖せず、一切時中無所得を得。三世諸佛の敎旨斯の如し。」と云うて居る。荷澤は天寶年間洛陽に赴むき、「顯宗記」を書いて大いに南頓の爲に氣焰を吐いたのであつたが、宗密が此の系統に出たのは全く北方に弘まつた南禪は荷澤

に始まるからの事である。荷澤の思想は又此の「顯宗記」に依つて明らかであつて、その思想は僧肇の般若無知涅槃無明の論と良く似てゐる。此の荷澤の流れを宗密は受けてゐるが宗密自ら「圓覺經大疏鈔」の中に、

荷澤大師所傳。謂萬法既空。心體本寂。寂卽法身。卽寂而知……寂知之性。擧體隨緣作種種門。方爲眞見。寂知如鏡之淨明。諸緣如能現影像。荷澤深意本來如此。

と云うてゐる如く荷澤の思想を汲んだのである。

次に澄觀の思想を一瞥するに、澄觀の本宗とする華嚴は之を錢塘の天竺寺の法詵に禀受したのであつて、非常に博學な人で三論・律・天台の教觀華嚴の法門等より經・傳・子・史・梵書・四國・五明・咒術に至る迄博綜せぬものはなかつた程であつた。斯くして澄觀は華嚴の中興として學德一世を風靡した人であるが、又禪にも參じたのであつて、「景德傳燈錄」卷十三に依ると荷澤神會の嗣として五台山無明を擧げ、その嗣として五台山淸凉寺澄觀を擧げて居る。又宗密の「禪門師資承襲圖」にも神會の嗣に浮査無名を擧げ　無名の嗣に華嚴疏主と記してあるが、華嚴疏主とは澄觀の事である。故に澄觀は牛頭の禪や荷澤の禪に接したものである事は疑ひを容れない。「高僧傳」を見ても彼の學德兼備なるを述べて後に、

十年就蘇州從湛然法師。習天台止觀法華維摩經疏。……又謁牛頭山忠師・徑山欽師・洛陽無

名師」。咨決南宗禪法」。復見慧雲禪師了北宗玄理」。

とある。それで彼の思想は當然禪思想を含んでゐるものである事は論を待たないのである。それ故に澄觀の心要とする所は禪家とその揆を一にしてゐるのであつて、此の立場から彼の華嚴に對する態度を見ても、

帝問國師澄觀」曰。華嚴所詮何謂法界」。奏曰。法界者一切衆生之本體也。從本以來靈明廓徹廣大虛寂唯一眞境而已。無有形貌而森羅大千無有邊際。而含萬有」。昭昭於心自之間而不可觀。晃晃於色塵之內而理不可分。非徹法之慧自離念之明智」。不能見自心如此之靈通」也。故世尊初成正覺」。歎曰。奇哉我今普見一切衆生」。具有如來智慧德相」。但以妄想執着而不能證得」。於是稱法界性說華嚴經」。全以眞空簡情事理融攝」。(續藏經第一輯、第二編、第三套、第四册)

とあるを見ても彼の華嚴觀を伺ふに足るのである。

此處で五台山に就いて考へるに、五台山は華嚴宗の專門道場とも云ふべく文殊應跡の聖地として信ぜられて、華嚴經の研究は最も早くから此の五台山に興つた事實より考へて見ると、荷澤の後を繼いだ無明禪師も或は華嚴宗と何等かの關係のあつた人かも知れないのである。又淸涼大師澄觀が五台山に於て無明に參じた事も無意味なものではなく大いに注目すべく、又由來ある事と知らねばならない。之實に唐の中葉に出た序論に於ても少しく述べた如く禪敎一致の端を開けるものであつ

て、宗密の如きは此處から來てゐるものと云うて過言では無いのである。試みに澄觀の「心要法門」を見ると、唐の順宗帝が未だ東宮で居られた時に蘇明俊と云ふ人を使として澄觀を清凉寺に訪はしめ、法に就て質問する所あつた時、澄觀は之が爲に心要を述べて、

語默不失玄徹。動靜豈離法界。言止則雙亡知寂。論觀則雙照寂知。語證不可示人。說理非證不了。是以悟寂無寂。眞如無知。以知寂不二之一心。契空有雙融之中道。無住無著。莫攝莫收是非兩亡。能所雙絕。斯絕亦絕。般若眼前。般若非心外新生。……。

と云うてゐるを見れば如何に華嚴の彼が禪家と合してゐるかゞ伺はれ、一個の禪師として現はれてゐるを知る事が出來る。此の澄觀の「心要法門」に宗密は註を書いて居る。（未完）